

外来語を使って「外国語活動」と「国語」を連携させる授業を創る

著者	西崎 有多子
雑誌名	東邦学誌
巻	42
号	2
ページ	45-64
発行年	2013-12-10
URL	http://doi.org/10.20728/00000319

外来語を使って「外国語活動」と「国語」を
連携させる授業を創る

西 崎 有多子

愛知東邦大学

外来語を使って「外国語活動」と「国語」を 連携させる授業を創る

西 崎 有多子

目次

1. はじめに
2. 日本語における外来語
3. 学習指導要領における外来語
4. 国語教科書における外来語等の扱い
5. 外国語活動における外来語の指導
6. 外来語の流入
7. 和製英語
8. 英語学習における外来語
9. 外来語の教材化
10. おわりに

1. はじめに

2013年6月、岐阜県の男性（71）がNHKの放送の中で、理解できない外来語が多すぎることによる精神的苦痛を理由にNHKに慰謝料を求め提訴した。外来語の氾濫は以前から指摘され続けてきた問題であり、官公庁までもが多用していることについても問題視されてきた。しかし、その流れは止まるところを知らず、ますます濁流となって日本語に流れ込んでいく。

『デイリーコンサイス カタカナ語辞典』の「まえがき」では、「(中略)そして昨今、社会の国際化、メディアの多様化、情報機器の発達などにより、カタカナで表される言葉は著しく増加し、流通するようになりました。さらに最近では、日本語であってもあえてカタカナ表記し、その独特の語感を上手に利用するケースなども見られ、こうした傾向は、ますます加速するよう思われます。」〔1〕と分析されている。

子どもたちは、既に外来語が氾濫している時代に生まれ、それらが日々増加している中で日本語を使いながら育てており、大人とは異なる感覚を持って使っていることは想像に難くないが、外来語は、子どもたちにとって日本語と英語が混在しつつ使用されている身近なことばであり、「国語」と「外国語活動」の教材としても取り上げられてきた生きた教材と言える。普段意識せずに使っている外来語を、今までとは違う見方をすることによって、新しい発見、驚きを持ち、言葉に対する好奇心を抱く機会にもしたい。

本稿は、外来語の特徴を踏まえ、その学習を「国語」と「外国語活動」を連携させ、子どもた

ちに新しい驚きを体験させる教材として用い、「ことば」への気付きと考察を促す有効な機会となるよう、今まで以上に外来語を活用する試案を述べるものである。

2. 日本語における外来語

日本語の語彙は、出自によって分けられる。本来語である「和語」は、日本固有のことばであり、大和言葉とも呼ばれる。「漢語」と「外来語」は借用語である。「漢語」は古く中国から借用した言葉であり、「外来語」は「漢語」以外の外国語から借用した言葉を言う。

表1 和語・漢語・外来語の分類と語彙例

日本語	本来語	和語	はやさ	たのむ	くるま	宿屋
	借用語	漢語	速度	注文する	自動車	旅館
		外来語	スピード	オーダーする	カー	ホテル

[2]

広辞苑による定義は次のとおりである。

【和語・ 日本のことば。日本語。国語。特に日本語の中の漢語に対して日本本来の
倭語】 ことば。

【漢語】 ①漢字音から成る語。漢字の熟語。⇔和語。
②漢民族の言語。中国語。

【外来語】 外国語で、日本語に用いるようになった語。狭義では、漢語を除く。伝来語」[3]

本来の日本語である和語を除いて、表1の分類でもわかるように、漢語は外来語と共に借用語とされている。借用語は外国語を借りている語であるから、外来語であるとも言える。しかし、日本語において漢語は外来語として扱われていない。漢語は古い時代に中国から入り、形がほぼ変わらずにそのまま日本語の中に定着したことばで、漢字で表記され、かつ音読みの発音が原則とされている。

外国から伝わったことばが、日本語・日本の中で定着し、いつしか日本語と同様に日本語に溶け込み、広く使われるようになったもののうち、漢語を除くものが外来語と言える。和語に対して洋語ということばもある。しかし、外来語は実に多様であり、その伝わった時期、理由、どのくらい受け入れられているか（定着度）は、それぞれ異なっている。江戸時代に伝わり、その後消滅せずに日本語の一部として定着している外来語は、その必要性が永続的に極めて高かったという証拠でもある。

それでは、外来語とカタカナ語は同じだろうか。カタカナ語は、外来語・和製英語・混種語に分類される。つまり外来語はカタカナ語の一部であるが、「外来語＝カタカナ語」ではない。和製英語は、英語のように聞こえることばであるが、正しい英語ではなく、日本の中だけで通じる英語のような日本語である。ジーパン、リストラがその例である。日本語における外来語の具体

例については、後述する。

3. 学習指導要領における外来語の取り扱い

3.1 国語

平成20（2008）年に公示された学習指導要領では「各教科等を貫く重要な改善の視点」として「言語活動の充実」が掲げられたことに伴い、小学校国語科の学習指導要領も改訂された。「語句に関する事項」に替わり、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加えられた。言葉が果たすいろいろな働きや特徴の理解が求められている。「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く」には、古典にある昔の言葉、世代特有の言葉、地域特有の言葉等の違いが含まれる。「語句の構成、変化、語句の由来」については、語句の成り立ちや変化、かな文字や漢字の由来、語源、和語・漢語・外来語についての知識が、「語感、言葉の使い方に対する感覚」には、言葉のリズムを感じたり、正しい使い方を意識させることも含まれる。

以下、小学校学習指導要領国語の一部分（関連部分の太字は筆者による）を記載しておく。

「小学校学習指導要領 第2章 第1節 国語第2 各学年の目標及び内容

〔第5学年及び第6学年〕2内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1)「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項（以下省略）

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

(ア) 話し言葉と書き言葉の違いに気付くこと。

(イ) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。

(ウ) 送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

(エ) 語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。

(オ) 文中の中での語句と語句との関係を理解すること。

(カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。

(以下省略)〔4〕

3.2 外国語活動

『小学校学習指導要領』と外国語活動について、3.2では以下、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』からの引用をもとに述べる。外国語活動の目標は三つの柱から成り立っているが、1つ目の柱である「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。」ためには、「児童のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めることの重要性を述べたもの」であり、「体験的に理解を深めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重する態度を身に付させたりすることは、

国語に関する能力の向上にも資すると考えられる。」(太線は筆者による)〔5〕と述べられている。子どもたちにとって、書物の中のことばではなく、自分たちが日々使っている、目にしていることばを題材として、体験的であることを大切にして外来語の学習を取り扱いたい。

「第2 内容 [第5学年及び第6学年]」については、以下のように書かれている。

「1. 省略

2. 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
- (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く。
- (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。」〔6〕

ことばの気付きについては、違いを知ること、それにより面白さと豊かさに気付くという過程を重んじて授業計画を立てたい。

指導の際の留意点はいくつか述べられているが、「指導計画の作成と内容の取扱い」における配慮事項」として以下が挙げられている。

「1 (3) ……指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないようにすること。」その例として、「単語の複数形や冠詞の強調ならびに知識としての理解をさせること、機械的に語句や文を暗記させたりすること。」が挙げられている。中学で学ぶ内容の先取りとならないよう、外国語活動で求められている学習内容から原則として逸脱しない範囲で、工夫を心掛けたい。

「(4) 指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。」について、解説には「外国語活動の目標を踏まえると、広く言語教育として、国語教育をはじめとした学校におけるすべての教育活動と積極的に結び付けることが大切である。さらに、児童が国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で得た体験などを生かして活動を展開することで、児童の知的好奇心を更に刺激することにもなる。」とされている。

特に、国語との関連、外来語についての以下の表記は注目すべき点である。「国語科との関連については、日本語とは異なる外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることで、言葉の大切さや豊かさに気付かせ、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせることにつながるものであることから、国語力向上にも相乗的に資するように教育内容を組み立てることが求められる。例えば、外来語の成り立ちや語源である外国語との違いに気付かせたり、発表などを通して、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の考えと比べることができるようにしたるなどの工夫が考えられる。」外来語を教材の一例として用い、外国語との違いを気付かせ、国語力向上に相乗的に資する教育内容が求められていることが明記されている。

4. 国語教科書における外来語等の扱い

小学校国語教科書の中で、採択率が比較的高いとされている東京書籍ならびに光村図書の1年から6年までの小学校国語教科書における外来語等の扱いについて以下に述べたい。

4.1 東京書籍 「あたらしいこくご」・「新しい国語」

1年次後半において、かたかなの読み書きを学習する。語彙は主に食べ物や授業で使う道具や楽器から選ばれている。2年次前半では、かたかなで書くことばを、①外国の地名や人名、②外国からきたことば、③ものの音や泣き声、の3種類に分け、どんなものがカタカナで書かれているかを考えさせている。語彙は、国名、人名、擬態語、擬声語等が扱われている。4年次前半では、漢字の音読み、訓読みについて学習し、音読みは中国語から、訓読みは日本語であることを、5年次では、漢字の由来と成り立ちについて学ぶ。6年次前半の「日本の文字に関心を持とう」ではひらがなとかたかなの由来と特色と、かな文字は音のみを表し、意味を持たないことも学ぶ。6年次後半の「言葉の由来に関心を持とう」では、いよいよ「和語」・「漢語」・「外来語」の由来を理解し、日本語についての関心を深める単元を学習する。この単元については改めて後述する。12月に「言葉は変わる」で、時代とともに変化する言葉と世代によって異なる言葉について学ぶ。

以下、1年次から6年次の該当部分を表にして示す。

表2 東京書籍「あたらしいこくご」・「新しい国語」

学年	教科書	単元名 ねらい・学習の流れ	扱われている単語
1	あたらしいこくご一下	かたかなをかこう 片仮名の表記を理解し、正しく読み書きする。身の回りから片仮名で書かれた言葉を集めて短文を作る。	サラダ、ハム、トマト、ノート、ケーキ、コート、シャベル、チューリップ、チョコレート、ミシン、ドーナツ、ソーセージ、ライオン
		かたかなのれんしゅう 片仮名の定着を図る。字形や筆順を確認させる。「ン」や「ツ」など形を間違えやすい文字に特に注意させる。	カヌー、ユニホーム、ロープウエー、キャラメル、クレヨン、ランドセル、ピーマン、バナナ、カスターネット
2	あたらしいこくご二上	かたかなで書くことば ①外国の地名や人の名まえ ②外国からきたことば ③ものの音やどうぶつの鳴き声 片仮名で書く言葉にはどんなものがあるかを知り、正しく書く練習をする。身の回りから片仮名で書く言葉を探し、集めた言葉で短文を作る。	ドイツ、パリ、アンデルセン、ヒューヒュー、ワンワン、サッカー、インド、エジプト、モスクワ、ニューヨーク、エジソン、ベートーベン、ピラミッド、スフィンクス、エジプト、ノート、コップ、ガラス、ブラシ、トマト、バナナ、ボール、ポスト、トントン、パシャパシャ、ブーブー、ニャーニャー、ランドセル、フォーク、スプーン、コケコッコ、ピアノ

4	新しい国語四上	漢字の読み方に気をつけよう 漢字の読み方の音と訓について確かめる。漢字の送り仮名について理解する。音は漢字が日本に伝わったときの中国の発音をもとにしている。訓はその漢字の意味にあう日本語を当てはめたもの。	鉄橋・橋、波長・波
5	新しい国語五上	漢字の由来に関心を持つ 漢字の由来について知り、漢字の四つの成り立ち（象形、指事、会意、形声）を理解する。いろいろな漢字の成り立ちについて、漢字辞典を利用して調べる。	
6	新しい国語六上	日本の文字に関心を持つ 平仮名と片仮名の由来と特色を理解し、日本語の表記について知る。仮名と漢字の特色を理解し、漢字仮名交じり文の良さを確かめる。漢字は一字一字が決まった音と意味を表すが、かなは音を表すだけで決まった意味を持たない文字。	
	新しい国語六下	言葉の由来に関心を持つ 和語・漢語・外来語の由来を理解し、日本語についての関心を深める。身近な外来語について、もとはどこの国の言葉だったのかを調べる。日常よく使う外来語が、それぞれ違う国に語源があることに気付かせる。「食べ物」「スポーツ」「音楽」など、観点ごとにグループで調べてもよい。だいたい同じ意味を表す語を用いて、それぞれの違いを考えることができるようにする。社会科の歴史学習と関連させる。	(英) カメラ、テーブル、バス (仏) オードブル、クレヨン、マヨネーズ (独) エネルギー、ガーゼ、カルテ (伊) アルト、ソプラノ、ピアノ (蘭) ガラス、コップ、ペンキ (ポ) カルタ、カステラ、コンペイトウ
		言葉は変わる 言葉が時代とともに変化することを知る。世代によって言葉が異なることがあることを知る。	さじ→スプーン、 えりまき→マフラー、 帳面→ノート、 チョッキ→ベスト

4.2 光村図書 「こくご」・「国語」

1年次前半では、身近なかなをみつける活動を行ない、子どもたちが毎日身に付けているものや、教室にあるもの、たべもの、文房具などから語彙が選ばれている。1年次後半でも、身の周りのかたかなを探す活動を続けることが想定されている。2年次前半では、主にスポーツ関連の語彙、2年次後半では学期関連の語彙が扱われている。3年次前半では漢字の音読み、訓読みの理解を学ぶ。5年次後期の始めに「和語」・「漢語」・「外来語」において、それらの特徴と由

来を学び、5年次後半の2月に「複合語」として和語、漢語、外来語のいろいろな組み合わせによる複合語について学習する。6年次では「言葉は動く」という説明文をしての単元において、ことばが時代と共に変化していくことと併せて語句の変化や由来についても学ぶよう構成されている。いずれの教科書の場合でも、外国語活動で使用する際に留意したい。

表3 光村図書「こくご」・「国語」

学年		単元名 ねらい・学習の流れ	扱われている単語
1	こくご一上	かたかなをみつけよう 片仮名の語を正しく読んだり書いたり、片仮名で書く語を使った文を書いたりすることができる。出てきた片仮名をノートに書く。身近な物の中から片仮名で書く言葉を集める。学年が進むと、片仮名で書くべきことばが不明瞭になっていくことが多い。言葉単位で慣れることを大切に指導していく。本単元での写真を使った言葉見つけを入口とし、教室、学校、家と、徐々に範囲を広げながら言葉を見つける活動を継続させたい。「教室の中の片仮名の言葉」などと、掲示コーナーを設けるとよい。	ハンカチ、ズボン、ポケット、ランドセル、ジーパン、シャツ、ボタン、ベルト、スカート、チョーク、マグネット、ノート、モップ、カーテン、バケツ、ストロー、ヨーグルト、パン、シチュー、フォーク、スプーン、ランチマット、サラダ、ジャム、トレイ、ナプキン、サインペン、モール、セロハンテープ、ボンド、クレヨン、フェルトペン
	こくご一下	かたかなのかたち 平仮名と関係づけて片仮名を書いたり、形の似た仮名の区別に注意して書いたりすることができる。見の周りにある片仮名に興味をもって探したり、片仮名を使って文を作ったりする。身の回りの印刷物から片仮名を見つれたり、新聞や広告にある片仮名を切り抜いたりする。見つけたものはノートまたはワークシートに丁寧に視写させる。	カ、キ、セ、ヘ、ソース、スリッパ、パン、カヌー、ツ、シ、ネクタイ、ソース、デパート、カヌー、ユニホーム、ヲ、ガラス
2	こくご二上	かたかなのひろば① 片仮名の語を読んだり書いたりすることができる。	シャワー、プール、タオル、サッカー、コート、ドッジボール、ダンス、リレー、スキップ、マット、ジャンプ、ゴール、バトン、ゴールキーパー、シュート、コーナー
	こくご二下	かたかなのひろば② 片仮名の語を使って、「何が」「どうする」が整った文を書くことができる。どんな言葉を片仮名で書くか知り、文の中で使うことができる。	オルガン、シンバル、ドラム、コンサート、トライアングル、タンブリン、トランペット、カステネット、けんばんハーモニカ、ギター、ピアノ、マラカス、バイオリン、オーケストラ

3	国語三上	漢字の音と訓 漢字には音読みと訓読みがあることを理解することができる。	
5	国語五	和語・漢語・外来語 和語・漢語・外来語の由来を理解することができる。例文や身の回りにある文章から和語と漢語の意味の違いを考えたり、外来語を探したりする。外来語の多くは近代に日本とアメリカ、ヨーロッパの国々との交わりが深くなって入ってきた言葉、ふつう片仮名で書き表す、日本人が発音しやすいように変形されるなど、元の外国語とはちがうものが少なくない、組み合わせたり、省略したりして、日本で作られたものもある。漢語も中国という外国から伝わった言葉だが、古くから日本語にとけこんでいるので区別している。たがいに言い換えることが可能なものもあれば、そのどれかでしか表せないものもある。分かりやすさや場面を考えてふさわしい言葉を使おう。	(室町時代) タバコ、カステラ、カルタ、テレビジョン→テレビ、テーマ+ソング
		複合語 複合語のでき方と組み合わせ方を理解する。長い複合語、発音が変わる複合語を声に出して読み、縮め方や発音の変化を確かめる。	和語+和語 角笛、正夢、綿毛、早起き、 漢語+漢語 消費税、国境線、輸入品
6	国語六	言葉は動く 時代とともに変化してきた言葉のありように興味や関心をもち、筆者の考えを読み取る。世代による言葉の違いに気付く。語句の変化や由来についても関心をもつ。	カレンダーとこよみ 衣→着物→服、衣紋かけ→ハンガー、さじ→スプーン、かしら→あたま、うつくし(かわいい)→めでたし、えり巻き→マフラー、白墨→チョーク、オーバー→コート、帳面→ノート、前かけ→エプロン

4.3 外来語としての取り扱い

表4 国語における外来語の取り扱い時期

学習内容	東京書籍 「新しい国語」	光村図書 「国語」
「和語」・「漢語」・「外来語」	6年11月「言葉の由来に関心を持とう」	5年10月「和語・漢語・外来語」
言葉の変化について	6年12月「言葉は変わる」	6年1月「ことばは動く」

「和語・漢語・外来語」の学習は、東京書籍版では6年11月であるのに対して、光村図書版では約1年前の5年10月に配当されている。外国語活動において、国語と連携して外来語を学ぶ時期については、国語においてこの単元が終了後かまたは早くても同時期に行うことになる。それより前では、外来語についての基本的理解が不足しているため、教師による的確な補足が必要になることに加え、後日予定されている国語での学習の一部が既知の内容となるため、この点でも指導に工夫が必要となるだろう。外来語について、国語での学習を待たずに行いたい場合は、国語の当該単元を当初の予定より早めて学習するという選択肢も可能であると思われる。いずれにせよ、国語での学習を終えてからの外国語活動と関連させた外来語学習がより効果的であろう。

5. 外国語活動における外来語の指導

5.1 “Hi, friends! 1” Lesson 4

“Hi, friends! 1”においては、“Lesson 4 I like apples.”の単元目標の一つが、「日本語と英語の音の違いに気付く」となっている。『Hi, friends! 1 指導編』記載の単元目標と単元評価規準は以下のとおりである。

「単元目標・好きなものや嫌いなものについて、積極的に伝えようとする。

- ・好きなものや嫌いなものを表したり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。
- ・日本語と英語の音の違いに気付く。

単元評価規準・好きなものや嫌いなものについて、積極的に尋ねたり答えたりしている。

- ・好きなものや嫌いなものを言ったり尋ねたりしている。
- ・日本語と英語の音の違いに気付いている。」〔7〕

この単元では、外来語が中心となっているわけではなく、好きなものと嫌いなものについて伝え合うことが単元の中心となっている。外来語を取り上げる場合、必要とされる時間数内で収めることは難しいと思われる。使用される表現は次のとおりである。

「表現 I like～. I don't like ～. Do you like ～? Yes, I do./No, I don't.

strawberry, cherry peach, grape, kiwi fruit, lemon, banana, pineapple, orange, melon, ice cream, milk, juice, baseball, soccer, swimming, basketball, bird, rabbit, dog, cat, spider」

単元計画によると、第1時の目標と主な活動は「日本語と英語の音の違いに気付き、好きなものや嫌いなものを表す表現を知る。」となっており、第1時が外来語の扱いの中心とされ、評価は「果物などの言い方について、日本語と英語では音が違うことに気付いている。」である。授業内容は、「先生の好きなもの嫌いなものを知ろう」をテーマに、おはじきゲーム・ミッシングゲーム・キーワードゲームの3ゲームが設定されており、おはじきゲームでは、「果物などの語を複数形で繰り返し言い、事項に自然な形でその音を何度も聞かせる。日本語と英語の音の違いに気付くよう、何度も繰り返して言う。」ことが求められ、キーワードゲームでは、『カタカナ読み』をキーワードにして、日本語と英語の音の違いを意識させる。」とされている。

この指導案で授業を行うと、日本語と英語の音の違いを意識するのは、ゲームを使って行うことになっており、取り扱う単語も果物とかなり限定的であるため、より幅広い語彙を取り上げ、発展的に授業を組み立てることが有効であると思われる。

5.2 『英語ノート 1』

“Hi, friends! 1”より以前に使われていた『英語ノート1』における外来語の取り扱いと比較してみると、『英語ノート1』では独立して外来語を中心的に扱う単元「Lesson 6 外来語を知ろう」があった。単元の内容は、

「1. 主としてコミュニケーションに関すること (以下略)

2. 主として言語や文化に関すること

- ・外来語とそのもとなる言葉では発音に違いがあることなどの面白さに気付くこと。
- ・外来語は様々な国から日本に伝わった言葉であることを知ること。
- ・ALTの国の食べ物を聞いたりして、文化に対する理解を深めること。」〔8〕

とされ、話題は「身の回りにある外来語」、主な語彙は、「kiwi, peach, melon, cherry, grape, lemon, tomato, cabbage, pizza, salad, steak, pudding, cake, donut, soccer ball, basketball, glove, gorilla, koala, kangaroo, TV, camera, calendar, piano, guitar, want, please, and」と食べ物、スポーツ、動物等を中心にしてより扱われた語彙数が多かった。

解説には、「外来語を使って外国人に話してみてもなかなかわかってもらえないようなときがある。「やはり発音は大事だ」と実感させられる瞬間である。同様に、海外旅行先で英語で注文したら、まったく違うものが出てきたというような経験もあるのではないだろうか。児童には本単元の中で、外来語に触れたりそれらを用いた会話をALTと交わしたりする体験をさせることで、自分の思いを正しく伝えるためには、発音に気を配ることが大事であることを実感させたい。」と、和製英語が英語としては通用しないことにも触れられており、現在よりも少し踏み込んだ内容になっていたことがわかる。

6. 外来語の流入

6.1 外来語が生まれる理由

古代から現代に至るまでのどの時代をとっても、国と国との交流があり、文化的にも経済的にも接触が行われれば、それに伴って一方の国にとっては新しいもの、考え方、文化等がもたらされる。古代から外来語が全く存在しない言語はないと言ってもよいだろう。外来語を観察することにより、その国の受けた外国の影響の分野と度合いが計られると言える。フランス語から芸術、料理、ファッション、ドイツから医学、イタリアから音楽にすることばが流入しているのがその好例である。水が流れるごとく、高い方から低い方へと文化も流れ、それに伴って新しいものを表現するための外来語が流入することになる。そしてその流れを止めることは困難となっていく。

外来語が生まれる理由はいくつか考えられるが、まずは、新しく外国からもたらされた物を表す適切なことばが見つからない場合、外国語のことばがそのまま使われることだろう。同じようなものが既にあった場合でも、違いを区別するために外来語が用いられる場合もあるとされる。例としては、旅館－ホテル、西洋料理店－レストラン、ご飯－ライス、牛乳－ミルク等が挙げられる。新しさやより魅力的であることを強調するために用いられたと考えられる。

必然的な外来語の流入以外にも、意図的に外来語が使用される場合もある。カタカナ語が持つイメージを利用するためである。この傾向は、特に商品名などで顕著である。後述する教材例において、極端な例を挙げておく。

6.2 日本語における外来語の歴史

古い時代に入ってきた漢語は、現在は外来語とされていないことは前述したが、元々は外来語である。外来語の歴史は、江戸時代に接触した国々から入ってきた外来語に遡る。その中でも古いものは、日本語の中でしっかりと定着し、本来の日本語であると錯覚してしまうようなことばもある。ランドセル、ボタンなどがその例である。日本語なのになぜカタカナ表記なのかをさえ思ってしまうほど定着度が高い。

江戸から明治時代にかけては、流入する外来語の数が現在ほど膨大ではなかったことや、それらの単語に最初に接する人たちがたぶん限られていたこともあるのだろう、漢字を使って熟語を作りながら新しい概念などを日本語に受け入れていた。蘭学から、天文、医学、語学、航海などの漢字表記による受容があった。翻訳や音訳の方法もあり、音訳の例としては、coffee－珈琲が挙げられる。主に蘭学者たちによって、直訳、意識、音訳のいずれかを経て漢字が充てられたとされている。音から合羽、イメージから乾酪（チーズ）、連想から円規（コンパス）がその例である。スポーツにおいても、庭球、野球等が、音楽においても風琴（オルガン）ならびに口風琴（ハーモニカ）等が生み出されている。経済・社会用語としては、銀行、会社、電話、新聞、等が生み出された。江戸時代は、主にポルトガル語・オランダ語・スペイン語からの外来語が流入したが、後になるとロシア語・フランス語・英語等が入り、明治20年頃には漢語・和語に対比してのカタカナ書きが見られるようになったとされる。キリスト教に関する外来語は禁教と共に表からは消えていった。

その当時の国別に分けた代表的外来語には次のようなものがある。

オランダ	オルゴール、スコップ、ズック、ピント、ペンキ、メス、ランドセル
ポルトガル	カップ、カステラ、コップ、コンペイトウ、タバコ、チャルメラ、パン
スペイン	カスタネット、プラザ、ポンチョ
ドイツ	エネルギー、ギブス、ゲレンデ、テーマ、メルヘン、ワッペン
フランス	アンケート、アンコール、グラタン、クロワッサン、デッサン、ピーマン、ピンセット、パフェ

国名が形容詞的な意味を持ってことばの最初についている外来語も少なくない。フランスが付くことばとして、フランス人形が代表的であるが、英語においてもFrench dressing、French fries、French bulldogなどFrenchが付いている単語は多い。中国を指す唐を表す、トウまたはカラが付いた単語もある。唐犬、唐黍、唐衣、唐獅子、唐辛子、唐歌など、中国・朝鮮だけでなく外国から渡来した意味でも用いられた。蝦夷が付く、蝦夷松、蝦夷鹿、蝦夷菊等もある。

国名よりも広い範囲をさす、西洋または洋の付くことばも多く、今でも使われている。西洋料理、西洋菓子、西洋人形、西洋医学、西洋南瓜、西洋洋服、西洋音楽、西洋剃刀、洋風、洋裁、洋室、洋服、洋間、洋楽、洋画等があり、これらは初期の頃は西洋から伝わったことを強調するために付けられたと思われるが、東洋や和と区別するためにも便利であったこともあり、淘汰されることなく使われ続けていると考えられる。対する日本を指すことばとして、和、国、日本、邦などがことばの最初に付けられた。和菓子、日本料理、日本人形、和風、和裁、国文学、邦画などがあり、その使い分けは単純ではない。

逆に、外来語として流出した日本語もあり、外国には代わるものがなく外国人が興味を持った、日本固有の文化的事物を表す日本語は、外来語として流出した。将軍、坊主、芸者、浮世絵、歌舞伎、柔道、剣道、相撲、漫画、照り焼き、寿司等が挙げられる。

6.3 日本語の特徴と外来語の受容

日本語は構造的に外来語を受け入れやすいのだろうか。何よりも、外国語を表記するためのカタカナが存在していることが最大の理由であるだろう。カタカナを使うことにより、そのまま原語を借用し、外来語として日本語に取り入れることができ、翻訳する必要がなくなる。

また、日本語は述べてきたとおり、単語や漢字の一部を組み合わせることによって造語が簡単であるため、複合語が作られやすい。一部の外国語のように、品詞によって型が決まっていることによる妨げがない。「～する」、「～な」、「～的な」など素人でも簡単に造語が可能である。

日本語において外来語を含むカタカナ語の持つイメージは、先進的で卓越したよいものを表しており、魅力的に聞こえると思っている日本人は多い。カタカナの付く商品が良いものであるという錯覚を生み、この錯覚は過大に利用されている。ほぼ同じ意味を持つ場合でも、カタカナ語にすることにより悪いイメージを払拭して気軽に使うこともできる。以前は、カタカナでの商品名がなかった商品でも、イメージを改善し、売り上げを伸ばすために、カタカナの商品名が多用されているものはないだろうか。タバコがその例である。一方で、かたくなにカタカナの名前を付けないものも存在する。新幹線や特急の名前がその一例である。それはなぜかを子どもたちと考えるのも面白いだろう。

7. 和製英語

江戸から明治時代にかけて、漢語を造語することにより、外来語を日本語の中に吸収していたことは前述した。漢字を組み合わせる新しい熟語を創り出す方法が既に受け入れられていたこと

が、その後のカタカナ語を使った造語の素地になったとも考えられる。ベースアップ、ホームステール、マイカー、ガードマン、フリーサイズなどは、2つの英単語を日本語として組み合わせ、日本語化したものである。長い英単語の一部だけを使っての造語も多く見られる。マスコミ、セクハラ、ファミコン、エアコン、コンビニ、マクド、スタバ等がその例である。

和製英語は、英語のネイティブスピーカーには通じないことばであるが、多くの日本人はそれに気づいておらず、通じる英語であると思っている状況がある。子どもたちも同様である。なじみ深いアイスクャンディー、ジェットコースター、ガソリンスタンド等の単語も、普通の英単語であると思っている人も少なくない。

英単語はそのままであるが、日本語における発音があまりに日本語化し、通じなくなっている単語も存在する。マクドナルド、マヨネーズ、マーガリン、キャベツ、ビタミン等がその例である。音声ではなく、意味のずれを生じてしまい、本来の英単語とは別の意味を持つ単語になっているものもある。日本語でシルバーというと、銀、銀色を指すだけでなく、高齢者を指すことが多く、原義がいつのまにか拡大されている。このような単語が多く存在することは、英語学習にとって、妨げになってしまうだけでなく、日本語を学ぼうとしている外国人にとっても大きな問題となるだろう。

8. 英語学習における外来語

外来語は、そのほとんどが英語から流入したことばであるため、英語を学ぶ際にも日頃見たり聞いたりしたことのある単語には親しみもあり、意味もほぼ同じであったりするため、新しい単語であっても親近感を持って受け入れることができ、修得に対する負担が軽減される。しかしそれは、その単語が英語としての元々の音声と意味をそのままに近い状態で保持している場合に限られる。

前述のとおり、誤訳されていたり、和製英語としてもはや英語としては通じないことばになっているものも多く、本来の意味が誤解されたまま通じるものとして理解されている英単語も少なくない。このような意味のズレが生じ、正しい意味と発音の習得を妨げる要因となり、英語が学習する上での障害になってしまう。

未知のカタカナ語について、外来語であることはわかっても、一部変形されていることも手伝って、その出自を調べるのが難しい。日本語のらりるれろは、l と r の区別をつけずにどちらをも表すため、元の単語に戻そうとしても区別がつかないことが生じてしまうだけでなく、rice と lice が同じライスという日本語になってしまうようなケースも考えられる。

9. 外来語の教材化

9.1 教材化の視点

外国語活動で求められている外来語に関する目標は、前述のとおり英語と日本語の音の違いに気付くことである。同じ単語が、英語の中で発音される場合と日本語の中で発音される場合で異

なる音声となることに気付き、興味を持つ子どもたちであることが求められている。

一方で、国語と連携させ、より多面的な外来語の学習を考える場合、音声の違いだけに限って捉えるだけでは不十分である。ことばを捉えようとするならば、多くの見方が必要となる。使われている音声、語彙、文法、意味といったことばとしての直接的な側面だけでなく、これまで遂げてきた変化、使用されている社会の在り様や文化等の面からも観察しなければならない。外来語はそれらの具体として子どもたちにもわかりやすい特徴を持っている。教材化するにあたっては、それらのどれかに焦点を当てることも、複数の面から多角的に捉えることも可能である。

低学年では、身の周りのかたかなことばを集める活動が国語において既修事項となっていることから、それを踏まえた上で、中学年以上でのことば集めは、その知的好奇心に見合った特徴が導き出されるよう、焦点を絞って行うことが肝要である。食べ物、動物、スポーツなどの初歩的で大まかな分類の段階から、それぞれの細分化につながることば集めを行なうことにより、新しい発見につなげることが可能となる。例えば、子ども自身が興味を持っている特定の商品や物の名前に絞って外来語やカタカナ語を集めてみるとどうなるか。それぞれの特徴が顕著になる場合が沢山あることがわかる。それはどうしてそうなっているのか、別の外来語や日本語に置き換えることはできるのか、そうでなければいけない理由は何かなど、次の思考へとつながる外来語集めをさせるのである。教師には子どもたちの好奇心が外来語集めからより広い学習へと向かうような、実態に合わせた工夫が求められる。

日本語に溢れている外来語の現状に気付き、その理由を考えると、日本人が外来語に対して持っている、洗練され、新しい、高級なイメージが、商品名等を中心に過大に広がっていることも意識させたい。売る側は、いかに売れそうな名前をつけるかに躍起になっており、買う側はそういった思惑を見極める目を持ち、適切な判断をしていく必要があることにも気付かせることも可能であろう。カッコいい名前や商品名に流されず、きちんと見分ける力が必要である。

外来語を歴史的に考える場合は、流入の時期、元の外国語などに注目し、なぜその時期にその単語が入ってきたのか、日本とその国の関係はどうだったのかなど、社会科との連携も含めて授業を展開することが可能である。

カタカナで書かれている外来語ではないことば、和製英語を取り上げても興味深い展開ができる。そのままALT等の外国人に通じるのか、全く通じないのかを、子どもたちが持ち寄った和製英語を試してみると楽しい。通じないカタカナ語は和製英語であること、英語の単語が少なくとも一部は使われているのに、なぜ通じないのかを考えるきっかけにする。発音が変化したのか、それ以外の部分に変化しているのか、どうすれば通じることばに変えることができるのか、ALT等からの助言も得て、皆で考えさせたい。和製英語は英語ではなく、日本人にしか通じない日本語であることを自覚させたい。

9.2 教材例

子どもたちの身近にある、自分たちで実際に手にしたり、見に行ったりできる範囲で、まずは

カタカナ語の現状を目の当たりにさせたい。以下、手軽に入手できる例を挙げる。実際には、子どもたちが興味を持っている分野のことばを中心に、興味・関心に合った身近な教材を集めたい。特異な例は、教師からの例として提示してもよいだろう。

(1) モスバーガーのメニュー

メニューにある商品名は、ほとんどがカタカナで、日本語はごく一部に限られていることに気付く。バーガーは元々アメリカの食べ物であり、基本の商品名はカタカナになることは想像できるが、どのくらいがカタカナなのか、またどの部分が日本語のままか。メニューをすべて日本語にしたらどうなるだろうか。カタカナのメニューとそうでないメニュー、どちらをより注文したいですか？



[9]

(2) ガスト (ファミリーレストラン) のメニュー

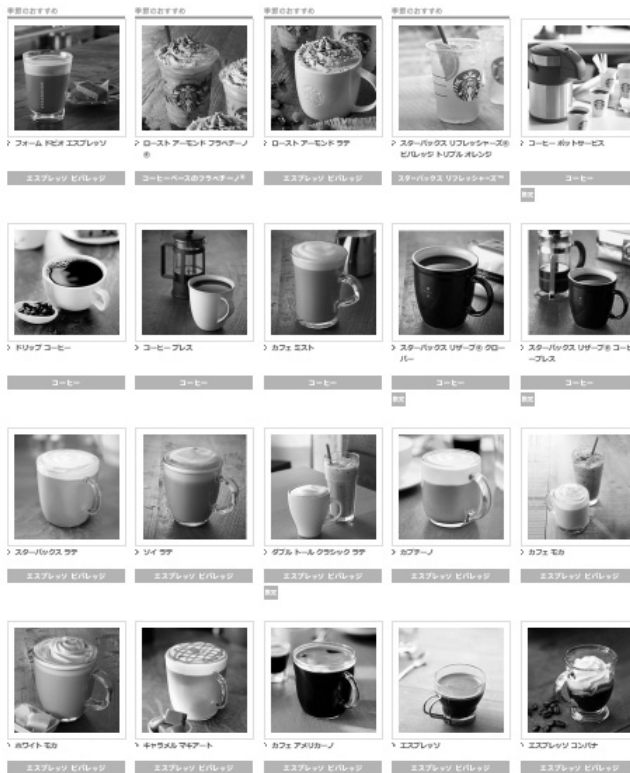
ガストは洋食中心のレストランであるため、カタカナのメニューが多くなることが予想される。どの程度がカタカナなのか、カタカナ以外の表示はどのようなものがあるのか。すべてカタカナ語以外にすると、どのようなメニューになるだろうか。より注文したくなるメニューを考えてみよう。



[10]

(3) スターバックス・コーヒーのメニュー

アメリカからのコーヒー専門店のメニューは、どうなっているのだろうか？〇〇マキアートや〇〇フラッペチーノなど、聞きなれないことばも多用されていて、最初は戸惑った人も少なくないだろう。スターバックスは、わざと日本人が聞いたことのないことばをメニューにたくさん入れている。注文しにくい可能性があるが、それでもそのままのことばを使っているのはなぜか。日本語らしい商品名はどのくらいあるのだろうか。



[11]

(4) イオン（大手スーパー）のチラシ

スーパーのチラシには、多種多様な食品、商品名が掲載されている。主に食料品の中で、カタカナが使われているものとそうでないものを一覧的に見つけることができる。カタカナが多い商品は、類似商品もそうなのか、また、カタカナでない商品の場合は他商品も同じなのかを調べてみよう。どういう商品がカタカナの商品名が多く、または少ないのか、それはなぜか。



[12]

(5) デパート（松坂屋本店）1階のフロアマップ

デパートの売り場は、主に階別に同種類の商品が陳列されているため、ブランド名や商品名の特徴を見つけやすい。化粧品売り場はどうだろうか。特異な例として興味深い。ここでは2社を除いて、ブランド名がすべてカタカナであることに気付く。また、ブランド名には、デザイナー等の名前が多いことにも気付く。それはなぜだろうか。希少価値とも言える日本語でのブランド名である「資生堂」は海外でも人気ブランドであり、そのままの名前で売られているのはどうしてだろうか。



[13]

(6) ユニクロの広告

和製英語の例である。ドライ・パジャマとは、どんなパジャマのことを言っているのだろうか。ドライ・パジャマ (dry pajama) は英語ではないことに気付く。他にドライ～というカタカナ語はあるか探してみよう。正しい英語では何と言うのだろうか。



オンラインストア 特別価格

ドライパジャマ (半袖)

※店舗は7/15までの限定価格となります。

7/18まで 通常価格 ¥990を

¥790

[14]

10. おわりに

外国語活動と国語を連携させるためには、それぞれの学習内容の分析、教育的相乗効果の見通し、子どもたちの実態の把握が必要である。学習指導要領ならびに解説において、必要性が述べられているが、それは具体的なものにはなっていない。実現するには、多少踏み込んだ教材の使用や、教育的効果を信じて両方を主体的に担当する学級担任の熱意も必要である。しかし、小学校教育において、踏み込みすぎてはいけない部分にはあえて踏み込まず、中学へとつなぐ引出しを増やす教育が必要である。

外来語が多い日本語は、柔軟性を持ち、適応力がある言語である。過度な外来語の流入を法律で規制しようという主張も一部ではあるが、種類が多岐にわたり量も大量であるため、実現は困難だろう。前述したとおり、流入自体を止めることは不可能に近い。これからの日本語を作っていく次世代である子どもたちには、外来語をいろいろな面から考え、感じるにより、自分たちのことばをより意識的に使いながら日本語を大切にしていってもらいたいものである。子どもの頃から、身近なことばについて考え、気づく機会を持つことは、そういった大人を育てることもである。教科と領域の垣根を越えて、国語と英語を始めとする外国語を学ぶ中で、そのような機会を提供することは、小学校教育においてこそできることである。

《引用文献》

- [1] 三省堂編修所 (2011). 『デイリーコンサイス カタカナ語辞典』三省堂
- [2] 新しい国語編集委員会・東京書籍株式会社編集部編 (2011). 『新しい国語六下 教師用指導書 研究編』 pp.66-67
- [3] 新村出 (1998). 『広辞苑 第五版』岩波書店
- [4] 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領』
- [5] 文部科学省 (2009). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』
- [6] 文部科学省 (2009). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』
- [7] 文部科学省 (2012). 『Hi, friends! 1 指導編』
- [8] 文部科学省『英語ノート1 指導資料』
- [9] モスバーガー公式ホームページ <http://www.mos.co.jp/index.php>
- [10] ガスト公式ホームページ <http://www.skylark.co.jp/gusto/>
- [11] スターバックス公式ホームページ <http://www.starbucks.co.jp/>
- [12] イオン公式ホームページ <http://www.aeonretail.jp/>
- [13] 松坂屋公式ホームページ フロアガイド松坂屋名古屋店 1 F
<http://www.matsuzakaya.co.jp/nagoya/floor/1f.html>
- [14] ユニクロ公式ホームページ <http://www.uniqlo.com/jp/>

《参考文献》

- 朝日新聞 2013年8月30日 ニュースQ3 「外来語乱用に危機感」
- 朝日新聞 2013年9月4日 「耕論 カタカナ語の増殖」
- 米国学術研究推進会議 (編著) (2002) 『授業を変える—認知心理学のさらなる挑戦』北大路書房
- 飛田良文 (1981). 『英米外来語の世界』南雲堂

- 廣渡太郎 (2009). 『間違いだらけのカタカナ英語』 学習研究社
- 岩淵悦太郎ほか (heisei 5). 『ことば読本 外来語』 河出書房新社
- ジェームズ・スタンロー、吉田正紀ほか (訳) (2010). 『和製英語と日本人—言語・文化接触のダイナミズム』 新泉社
- 陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 (編著) (2012). 『外来語研究の新展開』 おうふう
- 河口鴻三 (2004). 『和製英語が役に立つ』 文芸春秋
- 菅正隆 (編著) (2008). 『すぐに役立つ! 小学校英語活動ガイドブック』 ぎょうせい
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (上)』 岩波書店 (岩波新書赤2)
- 小泉清裕 (2011). 『小学校英語活動ネタのタネ』 アルク
- 国立国語研究所 (1990) 『日本語教育指導参考書16 外来語の形成とその教育』
- 小林忠夫 (1999) 『カタカナ語の正体—カタカナ語のルーツをさぐる』 丸善
- 直山木綿子 (編著) (2010). 『教育技術MOOK 新任教師のしごと 外国語活動 ゲーム活動の基礎基本』 小学館
- 町田健 (編著) (2001). 『日本語学のしくみ』 研究社
- 町田健 (編著) (2001). 『言語学のしくみ』 研究社
- 町田健 (編著) (2003). 『日本語音声学のしくみ』 研究社
- 松香洋子・野田まゆみ (2011). 『学習指導要領の小学校外国語活動の目標を達成するための144の活動集—『英語ノート』にちょっと工夫を加えて—』 mpi
- 南雅彦 (2009). 『言語と文化』 くろしお出版
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 国語編』
- 森山卓郎 (編著) (2009). 『国語からはじめる外国語活動』 慶應義塾大学出版会
- 直山木綿子 (編著) (2013). 『小学校外国語活動 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて5年』 東洋館出版社
- 直山木綿子 (編著) (2011). 『教育技術MOOK よくわかるDVDシリーズ 英語ノート1を活用した英語活動の授業』 小学館
- 直山木綿子 (編著) (2009). 『教育技術MOOK 小学校 新学習指導要領の授業 外国語活動実践事例集I』 小学館
- 直山木綿子 (2013). 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』 東京書籍
- 西崎有多子 (2009). 『小学校外国語活動を考える』 三恵社
- 西本鶏介 (監修) (1995). 『まちがいだらけの言葉づかい6 外来語』 ポプラ社
- 大津由紀雄 (編著) (2009). 『はじめて学ぶ言語学—ことばの世界をさぐる17章』 ミネルヴァ書房
- 佐藤弘 (1994). 『外来語と英語のズレ<英語を学び、使う人のために>』 八潮出版社
- 瀬田幸人ほか (編著) (2010). 『[入門] ことばの世界』 大修館書店
- 柴田武 (1995). 『日本語はおもしろい』 岩波書店 (岩波新書赤373)
- 白石範孝 (2011). 『白石範孝の国語授業の教科書』 東洋館出版社
- 山口理 (2012). 『国語おもしろ発見クラブ 外来語・和製英語』 偕成社

受理日 平成25年10月1日